



10
1274
卷 2



文章撰格下 下稿

彼章句を長く引ひとまゝり。対
句を、対句の中も、長き対句もあく、長き対も
の中小さくして、さう対あるかく、さうして対も
あく。かくあらう対あるかく、さうあはす
きり。



琴後集 文一三丁

あれまよしもとまよれ高きやまき
あらゆる事ありてひとをあくらゆくはくたむき
まくらゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
石をうくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
月をうくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

たゞ一ノれよのうへせ

「林」や「山」、「木」ハ「山」うなう「木」枝のうけを「山」
流すも「山」も「木」も「山」に「木」は「山」うなう「木」

云云同四丁

多の「山」、「木」の「山」うなう「木」を「木」
多の「山」、「木」の「山」うなう「木」を「木」

「山」の人も

「木」の「山」

「山」の「木」を「木」の「山」の例へ「山」引ひて「木」の「山」

「山」

「山」の「木」を「木」の「山」の例へ「山」引ひて「木」の「山」

「月」の「山」を「山」の「月」を「月」

二

かれハリスミモテナカタシマセキル

ミルセニシテエヌトヨウヒトシナシテキニシテ

アリ御のうらをまくと國の邊にあらむ

エヘ縁のくすはん有す矣

同三三

メのセモシテ

月ナツノイニ川ナリ

ミルヒエテアドリヤセモト

ミルモキテリシムシラシムシル

立花の傍ノモキテナシテモキテ

松本キムシムのゆくい

ミルヒヤキテ

湯屋ナリシムシラシムシル

彦ひのけのけのきらのる

ミルヒヤキテ

「まづの秋のちすも水の音もあそひて夕風ふくし
キテキテたまむの光ノ」
ナシマシタマムの光ノ

云云

「やせ井の木さわぐて木天つ是くうじ

山経の音をわせ木さわぐて木天ひを引ひ

同二

彦ひの木さわぐて木天の音もあそびて夕風もひ
音もあそびて木天の音もあそびて夕風もひ

木天の音をわせ木さわぐて木天ひを引ひ

木天の音をわせ木さわぐて木天ひを引ひ

木天の音をわせ木さわぐて木天ひを引ひ

木天の音をわせ木さわぐて木天ひを引ひ

同五

彦ひの木さわぐて木天の音もあそびて夕風もひ
音もあそびて木天の音もあそびて夕風もひ

かづるゆきのへの雪をされまえ
さうがまもりの移をも見えしりて
谷水をなれかまくわざれ
ねうゑはづくひ

ちのゆきの雪を移されをとあわせば
かまみをりそ多う所は文小字もうちの雪を
いふを文詞

東のまきまき八重磯つる橋五つと國風の小野とえ
西のまきまき赤坂一里をかまくらす千里のみの

みをまくらんまくらをやませしまひ大山やが

あまくまくらは移されをつくばすねくせみすせりくち
かくじくまくらをめぐらすあまがくけつほくをつく

同

かづるゆきのへの雪をされまえ
さうがまもりの移をも見えしりて
谷水をなれかまくわざれ
ねうゑはづくひ

同

あまくまくらは移されをつくばすねくせみすせりくち
かくじくまくらをめぐらすあまがくけつほくをつく

同

かづるゆきのへの雪をされまえ
さうがまもりの移をも見えしりて
谷水をなれかまくわざれ
ねうゑはづくひ

四

あまく尼キ。悉く引シ。も。あまくそれ。かく。うる
かや。文。こり。かく。ひ。教。の。さく。かく。うる
の。や。必。附。も。う。す。人。れ。づ。せ。ち。又。よ。智
も。首。の。古。文。の。す。き。物。ひ。と。漢。文。の。す。き。
ソ。ひ。う。せ。と。そ。の。漢。文。の。す。き。物。ひ。と。漢。文。の。す。き。
も。後。の。ね。き。四。六。文。解。向。う。き。す。き。う。き。う。き。
う。き。を。む。れ。く。ゆ。え。い。要。一。四。く。せ。と。う。き。故。よ。書
う。き。ま。う。き。す。き。う。き。う。き。う。き。う。き。う。き。う。き。
う。き。う。き。う。き。う。き。う。き。う。き。う。き。う。き。う。き。う。き。
う。き。う。き。う。き。う。き。う。き。う。き。う。き。う。き。う。き。う。き。
う。き。う。き。う。き。う。き。う。き。う。き。う。き。う。き。う。き。

う。き。う。き。う。き。う。き。う。き。う。き。う。き。う。き。う。き。

北斗周天。送玄冥之故節。
東風拂地。出青陽之飛魚。

惠日之光。至七葉而增色。

法灯之照。騰百代而称明。

水前水。誰染出碧潭之波。

山後山。何削成青苔之石。

積夢窓三餘暇。猶諳漢篇。

久葱嶺万里遊。還執梵莖。

太祖渟東定江南之策。雪晴連霄。

小杜題詩憶水西之遊。花期三日。

明印鯨波。恍若琉璃浸。一盞古鏡。

雨沾珠網渾如瓔珞綴萬頤明珠。

存仁道即終身造次顛沛不敢違。

勵貞操處富貴貧賤威武須如一。

多學少作、氣節不改、志向不變、德才不棄、文章不棄、事理不棄。故「彼土の夢ひ」が、
「やるやくをめりとがまと、言ふ所の想ひ中もこれ、あこちきわど、うやうそ、りうふすまう、ねじ
るにじつふしゆく、唐國すのうよ、うきはうもすま、うきはうもすま、うきはうもすま、

古事記書の意、御心の想ひ中もこれ、うきはうもすま、うきはうもすま、うきはうもすま、

鸚鵡能言不放飛鳥尚禮記

猩々能言不放禽獸

歸馬于華山之『陽』書

放牛于桃林之野

尺蠖之屈以求信也周易

龍蛇之蟄以存身也

莫客味

《滄浪之水清兮可以濯我缨》孟子

『滄浪之水濁兮可以濯我足』

形莫若就華
心莫若和

たゞこの御常の傍のものつるがるるにハリテ
雅りてモロコシありあくまくよりて何とく
か此湯をもん田一里行まかく善惡のうちわ
きりひきよまく一絶くせんかくおもむくもむく
ねむりうつを文を引ててくわくわく

祈年祭祝詞

上書『生鳴の御巫の稱言をまわる』
『皇神うちの前より白く』
『生國』
『至國』

御名白と稱言竟す。『皇神の敷坐。島の

八十島、谷蟆のさくらむ松木

鹽沫のさくら限

秩國、廣く

峻國、平々く

鳴の

八十島あつまうるく『皇神等のさくらぬゆき』
『皇御孫命』

のうづの幣帛を稱言竟すと定。こもれて伊勢よ坐、天照大御神の大前
白く。『皇大御神の見えしの事』四方國、天の壁立松木

本林庭立や良川の至り國の退立限り

望むて櫻洲

青雲の立棚立松木

『韓詩』の事の跡の至り山々故の事。『白雲の座向伏限』青海原

棹^{ワラ}舟^{フネ}船の艤^{ハタケ}の至り當^{アリ}舟^{ボウ}又^{アリ}陸^{シテ}道^{シテ}荷^{シテ}結^{スル}

堅^シ也^ハ磐^{クモリ}根^ル

木^キ根^ル履^ムニ馬^{マサニ}凡^{アリ}の至^ム曾^モ限^ム長^シ道^{シテ}か^{シム}ま^{シム}べ^ヘ

狹^{クシ}國^ノ廣^ク

峻^{クシ}國^ノ平^ク

遠^{クシ}國^ノ八^{ハチ}綱^ノ拘^ム引^ム下^シ署^シ

此文^ニ、谷^{カニ}膜^モの云^ムうり^トす、狹^{クシ}國^ノ云^ムうり^トす
是^ニ此^ニ詞^ムも、人^ノの心^リふ^くへ^ル事^ニよ^シ、あ^マく^シ對^シ
向^{むか}え^シて^シ、此^ニ物^ハ皆^ハ何^シし、口^給のあ^リト^シ、
義^ミを^畫し、善^シを^畫せ^シト^シ、彼^カか^シ、搜^リ鑿^ム
て^シ、造^リ立^ト、對^シて^シ、形^ハい^シむ^カわ^レし、今^ナう^シ條^シ言^ムも、

此教^ニ常^{アリ}ト^シ、是^ニ、^{シテ}雅^ク、俗^ク、文^ク、平^シ言^クとのけ
ちき^の之^の、物^ハと^シう^シ、ソシ^ムと^シ、二種全^セて、あ
のり^シと^シ、言語^の自^由と^シう^シ、又^シ

續紀卷三十一詔詞

藤原^{アヒト}左大臣^{ミコト}詔^{シテ}大命^{ヲ宣}

大命^{ヲ宣}詔^{シテ}大臣^{アヒト}も^{マサニ}也^シ

は^シて^シ待^ヒ御^{ハシメ}候^ム。や^{ハシメ}て^シお^シう^シる^ム。

羅^{ハシメ}て^シお^シう^シる^ム。や^{ハシメ}て^シお^シう^シる^ム。

大^シ言^{ハシメ}ト^シ小^シ言^{ハシメ}ト^シ

大^シ仕奉^{ハシメ}ト^シ小^シ仕奉^{ハシメ}ト^シ

政事^トとは

誰ミもミる
誰ミもミる

うそミもミる

誰ミもミる
誰ミもミる

うそミもミる

うそミもミる

うそミもミる

會ミすミ『大臣ミの申ミ政ミ聞ミ』ミやミん

明日ミすミ『大臣ミの仕奉ミ儀ミ見ミ』ミやミん

月日重ミり行ミまミ悲ミきミうきミまミせミばミる

年時積ミり行ミまミくミまミまミてミ勝ミる

あミ大臣ミ春秋ミのうミきミをは誰ミ傳ミる見ミるミばミをは誰ミ傳ミる見ミるミばミる

山河ミのうミきミをは誰ミ傳ミる見ミるミばミをは誰ミ傳ミる見ミるミばミる

大臣ミとミかミい

あれひミ大座ミとミ詔ミ事ミ『大命ミを宣ミ』ミすミ『大臣ミのうちりの

まミがミくミすミわミくミおミすミ

かミうミきミもミきミこミ

わミいミくミあミゆミくミ天ミ皇ミうミみミと

うミよミのミりミおミうミきミ

やまきよすらく 食國の政のすくも(おこま)

天下の民のやまきよ(おこま)とあらむ

まちよ語の言ひきあり、其の次より其のうへんをもとを
ハ、誰と俱とももあらず、山川のゆゑもとすとは、誰と俱とも
あらず、かくちえふる。

身がれ、うるいき毛とら、

山川のまきき多きも、若々誰と俱とも尼のそなへり弄ひくも、
秋の誰と俱とも尼のそなへり明くすれ、
やまの二段玉うきわくわれとねまくも、かく言と換へ
のすきも、句と疊句あらは、すこしひだりもつまむせきがゆ
あき、左文の妙あら所か、隊もと一篇のう、かくも
絶き重音ものや、玉ふれ變格のうも一二ハ延びて
向もとすくとあく、また西文、宣命の中すて、雅りて書
きゆるは、元の字づき為ふとて、全文と引つ同紀卷
もとすくとあく。

三十の詔詞

體　ハ　灰　ヒ　火　ヒ　地　ヒ　理　リ　火　モ
名　ハ　烟　ヒ　共　ヒ　天　ヒ　昇　キ　ル

アリムニテ凡ニテ、ナシ（漢ニテ）ヨルアリム、リ
アリムニテナシ、ナシ（此節セのモヤリスリ）、佛語
モリ因ニヒテ、カクスラムタモ、カクスラムト、カクスラムト
モル、故ニテアリスラムアホ、シテ金文をあけて、モ
アリム。

本
すら川のあまくまく水　中　あら人　まくまく水　本

され心もあらずと尼の

まゆのうへてえりせみる

おもむけり

行きかずとよあらうすちもいれぞ

行をつとめかくす尼の

あまゆきあらねぬもぞ

きの申すやうすをき

まゆのうへてえりせみる

りゆく

ひの天てはりゆく

りゆく

りゆく

おのむかくす

おのむかくす

おのむかくす

おのむかくす

おのむかくす

おのむかくす

おのむかくす

おのむかくす

おのむかくす

かのうのまかくらをもとむるひづる

さうすれかきく

さうすれかきく

さうすれかきく

さうすれかきく

さうすれかきく

あんじゆく

あんじゆく

あんじゆく

あんじゆく

あんじゆく

うき月をかひとそまへたまきやまなはれ心せんぢり

うき

あらふくまくらうたまくまくはれをまく

うき月をまく

うき月をまく

うき月をまく

うき月をまく

うき月をまく

うき月をまく

うき月をまく

あさひ 雪の山をかく

うらり雪とてありき

松山の雪をかく

聖母の雪をかく

祐林の雪をかく

鶴の雪の雪をかく

く葉のうきと人をひ

うの川を引と葉とみつまし

さくの橋もほそくとくとくとくとく

ぬをひくあはる立木か傍りうちまの

かあらんやう心を失へ

かあらんやうかあらんやう三つ住

たるのひよろこび

人ありとあめをなすりかかへ

秋の夕 端にともしきあらぎみの聲んや

まうじてうの山のまうじまうじまうじのまうじまうじまうじ又山の

まうじまうじまうじまうじまうじまうじまうじ

三
えぬ

えぬ　たむかひのうとくの手とひよけを信すかへとせんを
やまかはるのからゆきすみのあらぐれ　まかうほせぬ

たむかひのうとくの手とひよけを信すかへとせんを
ひよけのあらぐれ　まかうほせぬ

大歎詞

内まふのうう紀實之

奇甲復見正酒國羽佐

奇萬門翁生きりて參事小おややれて万葉集を讀むる

経日月日水争も枯れぬすすめ

ほほくとまき

かみうとまき

雪をもみよしとすつと夜をうけまし

人まかひ

あくとぞ君に従ひとひきゆりてとく風をうつりまし

千

被ひま

シラカシハのあをとひくとまきせしとまくとまく

サヤキタマス

さちつとそあく野にわがみとまくとまく

山下

まくとまく

ゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれ

まくとまく

かづ人のみよあみよ

かづ人のみよあみよ

かづ人のみよあみよ

かづ人のみよあみよ

秋をも

かづ人のみよあみよ

かづ人のみよあみよ

人まうるまくすれとまのすくまくらむへひだり

三〇

さくのまくまくせんべくまくらむへひだり

三一

ねまうるまくせんべくまくらむへひだり

三二

まのあくべくとまかはくまくらむへひだり

三三

しもくめくまくせんべくまくらむへひだり

三四

けつ篇うくまくせんべくまくらむへひだり

又陽疊寺長とも短とも互に入出る事、大方皆、古文のて
けり。山の外、ほく下の處の山、その中で、秋の木へ立
田川ふるえ、まきあらうどりの、山の音、さうる聲匂ハ、何より
長とも、淺くやるふれど、さうる音、さうる聲、さうる
聲匂は。

秋の木へ立つて、まきあらうどりの、山の音、さうる聲、さうる

三五

高川の木へ立つて、まきあらうどりの、山の音、さうる聲、さうる

三六

あらう、陽疊の聲、りづきあれど、かくやうれう多ううこむ
竹ぬちくへ、又人まうるまくすれとまのすくまくらむへひ
だり

三七

子雲云、文章は巧みに作るよりは、うりよりは
筆をうちて、筆をやむむりと、筆をもつて書く句を、古文の
句法なり。こそ巧みりて、文章の巧みを、口給の能
力をもつてありて、巧みを厭ふことはあるべからず。
またこそ、う得りもあらずありて、漢籍世説新語補、
江表記、陳元方、難為兄、季方、難為弟、うるふ似、
すきとも、上下に抜けりて、筆意有ればま、うつりりま
るゝ筆意、又人すらがふれと、かのゆ
くまされ、こそ彼、文王既没、文不在茲乎、うえよ思
ひよれりて、ふれと、身自うそあらず、ちもを立文うそと
彼王のあつておき相あれ、かくうつりてけりと、
彼王のあつておき相あれ、かくうつりてけりと、

又一篇の文、も詩の大序をもじりて、かまくらすましにえ
りて、詩をかうう詠ふれ、かくうううううううう、あらぬう
うううう、あらぬううん、又彼ひうううううう、ふと
つううかううう、うううううう、章句れぬやよ、
うううう、詞うううう、うううう、唯全文の詞うう、
うううう、うううう、うううううううううううううううううう
日記のうううう、うううううううううううううううううう
うううう、うううう、ううううううううううううううううう
うううう、うううう、ううううううううううううううううう
うううう、うううう、ううううううううううううううううう

ヘニ、トムル色。

ナ音カラソム國モミシリ

船泊カラホ

馬のミルモキテ

カヌ

新羅也ニ行ヤ

唐人書

飯

色

ちく

サ四日謹仰シオモヒヨリタカタ

カヌ

【モウカタマムニタヒトニテ】^{二文字}

^{+文字}モアリテモアリ

サ五日守のカタタガリモテモテカタ

タスレニリモテ

聖

カタタ

サ六日守の館ラカタモアリのカタタモテカタ

カタカタタガリモテカタ

タスレニリモテ

カタ

サ七日守の館ラカタモアリのカタタモテカタ

カタカタタガリモテカタ

タスレニリモテ

カタ

サ八日守の館ラカタモアリのカタタモテカタ

カタカタタガリモテカタ

ナ九

カタタ

『さきうす』

りかずえ

りゆめのひづる

まゆのそり

正月うらましの

せりふのあがみとぞ

『わがくま』

湯ゆきのまつり

さうじ

さうじ

『さきうす』長樋よしもと

かうせうわれらりね

う

う

『さきうす』

う

う

う

『太陽』

國のまつり

たまごのまつり

『さきうす』

はるかのゆきのまつりにそよぐ北風ひ

かくさすすみにさへあつて

せうのゆきのまつりにそよぐ北風ひ

かくさすすみにさへあつて

せうのゆきのまつりにそよぐ北風ひ

かくさすすみにさへあつて

みくわ
みくわめくわせおもてをれまくへりうけられ
みくわすまんじゆうひうまきあくま

海のちよすをうくまく

アリのれ月のうまそあくす

そ月の満月とそげうちれを月と伊達のつまう

國まかうあらん瑞幸す

御まえすひとがみ

めのくわやくわくわをとくと

うるひくわ

叶ふまくわまくわまくわ

アリのれ

・まくわをとくと

月の新葉をとくとく

人の心もかくすまやぢん

サアラルイモウタヒテヨウヒの船ふねをとくとく

船の木葉をとくとく

のくわ
のくわうきまくわ

今かくわあらかひてゆくふる者をくわうそ國まく

うくわかくわいとくわうそくわうそくわうそくわう

かくわまくわまくわ

たまご

やまぐち　海　あさぎのまくら

さるまきやわんかばくあそびよ】中はうよおを引くとまく

さるまきあくわく

ぬく　まくら

のまくらへながるのまくらへまくら

まくらへまくら

二月形　おのるゑ　まくらの形　まくらやこのれいづみ

まくらの形　まくらの形　まくらの形

黒崎の松原とてや

まくらのくらまく

まくら

まくら

まくら

まくら

まくら

まくら

まくら

かくらまきあくわくまくら

まくら

まくらまきあくわくまくら

すまの明神

きり我をかほきもあまんふくらむのう

うてゆとたまきゆ

ゆ

ゆ

ゆ

ゆ

ゆ

ゆ

ゆ

ゆ

ゆ

かくしてまつれももう風波やまでりやしき

りやうこかきのばく

かくすみゆみ

ゆ

ゆ

ゆ

ゆ

ゆ

ゆ

たまゆま

ゆ

ゆ

ゆ

ゆ

ゆ

ゆ

ゆ

ゆ

ゆ

たてまつて海にさしかかるときれいもは海の波

そひうちの海

そひうちの海

ゆ

すてゆくかの人のよきよすうめられま

きのりめねぢるゆ

ゆ

ゆ

ゆ

ゆ

ゆ

かくすみゆみ

ゆ

ゆ

ゆ

かくすみゆみと書ふがも書き入れとて、筆者

つ筆者この筆の筆の筆へと書き入れて、長歌の句法

この既忘れられ、文章ハ、筆すくの筆と、失り

かく、筆すく被序文ハ、あくべり、故ニ、遷て口吟の像

を失れ、かくもすくも、筆を、昔日記ハ、船中の筆や

よ、りくわくにかきしれ、悉く口づくらひと、

四

の事も少なくて、いざるもうづくづくのひまなを
ゆき此舉へまゆ。

船移され

（ほらみのほりえ）

馬のまれりす

（はなみのほりえ）

此類のす、およそ うりへ、やううへ書く、これ一部のす
ハあくま、章句のうつま、對句あるうつ對へるま、
おと船、馬、あるを、峰、諺とあるを、一文字と十文字とを
合せたまうる、其下の體もす、おとまかへりうるを文
章は、すりくふらやまくゆえもうちもも、しよきよまく、
うれすうす、こまくまくあり、既に長歌 摂拾よつまう如
く、長歌の疊句、大方二句ずつのまつり、おつりも短

く、疊句あるふまうれ、其疊句の片違ふぢう所、
一を成さへ故に、これを嚴重するが、又、文を
五七の数あらざれん、章句を、歌す、長くないからま
あれ、疊句の方子ハ、さるりそれも、若し歌ふそれを含ん
どする時、口語の便を失ひて、彼、後の漢文もあらかじ
うだり、かれ、詔を對しても、其詔とも、全く合ひそ
まく、全くそく、全く詔くわらま言を、ちりと審へ合
せんとする、作るうすむ、例のうすむき方と、あらか
う、さるく疊句が、めぐりうりて、物うすむても、疊句が
貴きうすむをもす、又、警記中と、多く、対句の、却てう
けほどの対ももす、うすむべきをもす。

又右の次も、

かくもあきらめりま。

やまくらも云々。

又

さきの守も、

いきの守も、云々。

さきの守も、云々。

あくのうとけうつまくう疊聲も、皆右の傳え、まく平
音うづみと相子うち級り、あくつむ何や何ぞ、おも
じくゆゆうう、おおゆすも、彼大譲うきはまくに巡
う、うきうきうきうきうきうきうきうきうきうきう
あひあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ
あひあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

河のほとりよとせきも、きくやうぬ

あゆのくも、尼吉をみぬ

岸も、こまくほほ

ふねも、おおまわせむかが

きくよる、うきうきうきうきうきうきうきうきうきう
船中え、心を痛がひあやううとつまくにん

あらやうう、河ふねうめうく

とりえ、うちのよし、心はきうきうとく

た月をくも、うきうきうきう

うきうきうきうきうきうきうきうきうきうきう

かくもあきらめりま

たゞりて書ひの妙ありと向ふも、いと多く、名を文章と
あくべども、短きほどのものうふを、河とうら書ひの
こと、一ふう外はあらへても、威もあれども、尊もる。威ふ
く、あやぶるまじく文章も、うそうりさん、又佐吉の御の所へ
強て立文のうりあひゆ。

ノリ

男之手赤調。

女之手赤調。

さし一年の間、民の手をもつて、りうきを繰て、うとう。

祈年祭

七

ええ、などと見て、いと何や、と章句をかき、形は等より、い
き、いよ、と、いわりて、いと、古文も、民戸より、ほりく、と、すと貢調
のうを、崇神記

平野祭詞も、天皇我朝廷爾、伊夜高爾、伊夜廣爾、伊賀志
夜具波延乃如久、立榮之米、やまとりいも、ふかむりく、次
りよもと、うて、ひづるを、またもと、うて、ひづる。

ええ、などと見て、いと何や、と章句をかき、形は等より、い

手筋ハタケ 水沫畫筆

向股ハタケ 泥畫寄て

より、大伴氏の遠祖、命の言舉ハシマツ、繼令山ハシマツ、尾テを海シマツに死マツすも、かく尼ハシマツ、君ハシマツは奉ハシマツんハシマツ事ハシマツと、

海シマツ水漬死シマツシマツシ

山ハシマツ草生尾ハシマツハシマツ

大君ハシマツ、ハシマツ能持ハシマツ三ハシマツ孔ハシマツ

より、大刀鋒ハシマツ振ハシマツ、ハシマツ矢ハシマツをほざハシマツて、敵ハシマツをハシマツす

をハシマツ記ハシマツ

劍ハシマツのハシマツ上ハシマツあらうハシマツ矛ハシマツ

矢刺ハシマツ追ハシマツ

より、東ハシマツ防人等ハシマツの言舉ハシマツ、敵ハシマツに向ハシマツいハシマツ、ハシマツ矢ハシマツの薙ハシマツり死マツる、

心ハシマツ外ハシマツ、海シマツ月ハシマツ、ハシマツとハシマツ、ハシマツ讀紀卷ハシマツ

額ハシマツ、ハシマツ箭ハシマツをハシマツつハシマツも

背ハシマツ、ハシマツ箭ハシマツをハシマツくハシマツく

より、礎ハシマツを堅ハシマツく、棟ハシマツを高く、造れハシマツ大宮ハシマツをハシマツ、ハシマツ神武記ハシマツ

底ハシマツ石根ハシマツ宮柱ハシマツ

高天原ハシマツ千木高ハシマツ

より、雨宿ハシマツを避け、日影ハシマツを陽ハシマツ、宮殿ハシマツのうちハシマツ、朝ハシマツ暮ハシマツを、ハシマツ廣ハシマツ

大殿ハシマツ賀ハシマツ

祝詞ハシマツ寺ハシマツ

天ハシマツ門ハシマツ

日のハシマツ背ハシマツも隠ハシマツります

より、朝ハシマツも多く、又大きハシマツも、少くハシマツかくて、其ハシマツを、ハシマツ廣ハシマツ

物、鱗狹物スルヒ、又大キツクシル、サニシタニアツテの獸スモノスリマセ
 モ、席物シテモノ、モ、菓物カモノ、海山の物シマヒマツキを、多くハシシテ、備アラメテ、御饗ウチヤハ
 ト、ハ取ヒシムの机ヨコも、百束ハジの机ヨコもリヒ、又其御饗ウチヤハの料リヤウの
 物モノ、石板シブタの代シタニの物モノリヒ、ダリタダリ度テツモ、曠カク一イチす
 酒サケ、ハ鹽折シヨウザク、酒サケ、萬リヒモ、サ鉢シヤク、ハ刀タタキ、ハ槍折シヨウザク
 細スジ、アモリヒ、成長シキ、シマモ、シリモ、ハ拳パン、須胸スニマフ、
 リモモテリモテ、千人ミツロクヒジ、引ハシムキ、ほの大石ハシムシ、千引石ミツロクヒシ、
 岩カニのあまアマ、アレアレ、五百箇ハナガナシ、磐村ハシマムラ、カクルヒリカクルヒリ
ハ、既ハシマシ、矣ナガハ、文シタニ、中ハシマシ、出シタニ、語ハシマシ、多ハシマシ、されシタニ、、引ハシム、
 文シタニ、ハ、心ハシマシ、つけハシマシ、味ハシマシ、ナキトハシマシ、アヒトハシマシ、技ハシマシ、出ハシマシ、
 りシタニ也ハ、又物モノの名メイ、堅ハシマシ、圓ハシマシ、強ハシマシ、柔ハシマシ、
 天ハシマシ之シタニ石位シタニ、天ハシマシ之シタニ磐ハシマシ、天ハシマシ之シタニ矢ハシマシ、
 天ハシマシ之シタニ矢ハシマシ、ハシマシ

シ、又石槌ハシマシの太刀タタキ、頭槌タタキ太刀タタキ、又稜威高鞞タタヌキ太刀タタキ、又此
 が生シタニ、生シタニ、生シタニ矢ハシマシ、生シタニ日ハシマシ、是シタニ日ハシマシ、生井ハシマシ、崇井ハシマシ、山
 坡ハシマシ、山坡ハシマシ、ゆくを、磐根本根履佐久弥氏ハシマシと、岩谷ハシマシ、
 ゆかまハシマシと、りふハシマシを、谷八谷ハシマシ、峠八峠ハシマシ、りまハシマシの日數ハシマシ、
 八十日ハシマシ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、日ハシマシ、夜ハシマシ、日ハシマシ、
 月ハシマシ、日ハシマシ、月ハシマシ、日ハシマシ、妙ハシマシ、年ハシマシ、
 月ハシマシ、年ハシマシ、月ハシマシ、年ハシマシ、月ハシマシ、年ハシマシ

ハ、雪ハシマシ、奥ハシマシ、國ハシマシ、被布ハシマシの『稚國ハシマシ』ある。

ハシマシ、初國ハシマシ、作ハシマシセト、内修ハシマシ、詔ハシマシ。

ハシマシ、被布ハシマシの『稚國ハシマシ』ある。

國子館アヤタニケン

國の傳行アシハラガシハシテ

童女の『胸組マダラ

大魚タタキのさなづきつけ

鰐テガメ傳タスハシ

ゆゑて『三程ミツノ』の綱ハシうち挂スルて

國クニニヨシホクニニヨシ引ハサウ末スル綱ハシセラ國クニニヨシ豆マツダのチ絶カツレ小ハラハラ百丹特ハヂハラハラ系クニコヨウ

河カワのノもモくムかカふ

仰アラハ時リ

あらかじめアラカシメハハシまマせセ代タリのノとト、傳ハスてハスるハス古オ文モんモンえエてテ排ハシすスくクちチれてリゆム、國クニニヨシホクニニヨシ行ハシメル行ハシメル、追ハシメル人ヒトのノ例ハシメルハハシメル行ハシメル、本居宣アマガタハジルのノ序ハシメル字ハシメルにノられハシメル、さハシメルもモ、こう後ハシメルかカはハ國クニ末スル國クニ末スルとトいハシメルやハシメル、新ハシメル本ハシメルのノ訓ハシメルもモ又ハシメルわハシメル。

書きハシメルありハシメルもモ、古オ書モんモンのノ書法ハシメルまマでセ、まマかカまマだダ、

け祠ハシメル、被ハシメル大ヒロ神スギのノ、綱ハシうち掛ハサウてハサウ國クニ末スルとト國クニ末スル、アラハシメハシメル、
既ハシメルてハシメルよ、其カ形容ハシメルまマ、目ハシメルまマのノうウどドれレどドれレどドれレ、あハシメルすスてテり、
もモんモ綱ハシ、多ハシメルニ、雅ハシメルるル、物ハシメルハハいイうウふフ、寺ハシメルタタリリ、
すハシメルあア、同ハシメル心ハシメル、下ハシメル手ハシメル、下ハシメル手ハシメル化ハシメルのノ綱詞ハシメル、枕ハシメル繩ハシメル、千
石ハシメル繩ハシメル、アラハシメハシメル、之ハシメルはハ、こハシメルうウく、後ハシメルもモゆムえエ、元
等ハシメルともモ、アラハシメハシメル、言ハシメルまマすスとト書ハシメル、今ハシメルもモ又ハシメルりリ、
未ハシメルつきツキともモ、ウハシメルもモ、シハシメルモモ、

谷ハシメル蟻アリのノ秋度核ハシメル、
新年祭ハシメル祝詞ハシメル

谷ハシメル蟻アリのノ秋度核ハシメル

鹽味ハシメルのノそまソマ限ハシメル

とつて、こそ 蛾蠻（アマテ）、あやきすまそ、いづくのれすすまくをと
湯（ヨウ）かくゆきすま（ヨウカク）ほせ、蛾蠻の術（アマテノノウツ）ものあれ、甚細（シニキ）ふうと
湯水（ヨウスイ）の留（リュウ）はすも、限（リミット）りも、もとあらうとぞ
よもせも、此天下の廣（ヒロ）さ限（リミット）り、あらうかく見（ミム）え、かくく
あくと、りよそふりそむけ候（ハガタシム）、かくくよし、かくくよし
ニ文章（モンジヤウ）をきく候（ハガタシム）、候（ハガタシム）ニ文章（モンジヤウ）、かくくよし
深長（シナガタ）あまうと、りいぢんや、移（シフ）くとい。

天鵝（テンゴ）羽立（ヒタチ）移（シフ）み

國（クニ）崩（ボウル）退立（ヒタチ）限り

『青雲（セイウン）の棚引（タケリ）きみ

『白雲（セイウン）の向伏（ミタマツル）きみ』

船袖（ブリヂュウ）の至（シテ）移（シフ）み

馬（マ）凡（ヨモギ）の至（シテ）限（リミット）り

たゞもりそ、言靈（モノコトノクモリ）す、國（クニ）のくも、むか言（モノコト）なんや、
文章（モンジ）をかんともきん、先（シラ）から妙（メイ）ある、古語（コゴト）どりを、う
きくはくく味（シテ）くへく、うかん文（モンジ）すも、其のちくくす
く、事（モノ）修用（シウヨウ）ひくわくく、又自（ジ）ら作（ツク）らも、かくべきなく、故古書（コクシクシク）の
く、すかくへく、又自（ジ）ら作（ツク）らも、かくべきなく、故古書（コクシクシク）の
中（ナカ）、跡（シテ）と飾（シフ）て、跡（シテ）と書（シテ）まわらへて、りくわくある
御（ミコト）はくひうそ、あかん氣（モカシ）をつきりとすれすまうまくと、松
次（シテ）も、かくへく、描（シフ）めて記す、

速須佐之男命より西國をさへて八奉須されま至るまで

たまきりうちき其

やまきりまかまきは青山を

枯山あら泣枯ラ海川ハモクシ

泣乾トヨムタカツ

行く者跡のまちなひ^二根魂かす皆解

まうの跡のまちなひ^二。あす悉く解き中黒昂

仰みくも

仰めくも

仰めくも

仰めくも

天草

仰きまどりやうみまづの

ソウの仰続の玉を

壇

ソウの

ソウの

ソウの

ソウの

ソウの

ソウのゆきをかく又

同丁

蟹貝比賣と

廿二

蛤貝比賣ヒツミこゑせき作ハセキ活ハタクアマモ

鼈貝比賣ヒツミさくらんサクラン集シラフも

蛤貝比賣水ヒツミを持マツルての紅コウトタマリテ

同ドウ

三三丁

同ドウ

七丁

『生太刀ヒツタケ

『生弓ヒツギ

『矢ヤ

『弓ヨウ

『弓ヨウ

『弓ヨウ

『弓ヨウ

『弓ヨウ

同ドウ

四丁

同ドウ

七丁

同ドウ

三丁

同ドウ

六丁

同ドウ

五丁

同

五丁

改火照命ハ

海章彦ニミ
贊廣物贊狹物

火折命ハ山幸彦ニミモ爲物毛柔物

云云か云

幸易サルシテ云云

山佐知母ニミ佐知ニ

海佐知母ニミ佐知ニ

佐知カニミトツ所ニ云云

故其事みそノ千拳劍をやひ

五百鈞を作毛ニ賞

一千鈞を作毛ニ賞

も毛ニ賞

も毛ニ賞

も毛ニ賞

昂内ニキテ又まうニキテのまう又ニヘ重ニキ

同

七丁

五百鈞を作毛ニ賞

一千鈞を作毛ニ賞

も毛ニ賞

も毛ニ賞

も毛ニ賞

大代蘇ハ

五百鈞を作毛ニ賞

同中參

丸を秋山の下水壯夫

井と春山の霞

社夫ニミテ

所組のりくく

我ノ

百取の代物を

間一毛人草

神智

アキラの償

アキラの

アキラの

アキラの

アキラの石

アキラの

アキラの

アキラの

アキラの

アキラの

崇神記神託詞

たすもあうり出雲人よつき 真種の あゆみ あゆき

御神の 底寶

山河の水泳 御宝あめかげよ

御神の 底寶

御寶々

余仁記ハ

いよ倭姫命 大御神の あまく やまと おとおまく

御寶

其の後もさうをもつて麻呂ハ 筵のをもとえひ便すまし御宝すと

さみうく 天津神 ふりわよし川

國津神 すりわよし川 は圓まつまゆ寺

三百九十九のうち 六種の神等

大神の和魂ハましま

荒魂ハみれらしく務麻ミラシのむかよし賜へま

松陽ハ、鷦々あきるにまを、尼へきちり、五かやくも、三くも、うる
ソレハ、もとやの何を、おれどもれくもあが、御れも、いわ
のきくつ何やくもあら、奥野のねひのとよに何く、第一と。二段
三教連用の句、第二と。方邊加用の実句、第五と。光彩加用の実句、
第六と。枝葉加用の実句、第三と。數量加用
の實句、第四と。異類中虚の句もあらず。歌う、重句を、光彩、数量の上と
一、次下と、改古文の事。古文の事。古事記上 卷五十七丁

出雲國の多藝志の『小濱ニ天ニ』御舍作と水戸の神の孫『櫛ハ玉の神
を膳夫』と『天ニ御饌』とす。御作と御作と御作と御作と御作と御作
『度の煙』と傳ひて『天ニ』千呂良近を作。『海布の柄』と刈て『大引き印』と作
『海草の柄』と刈て『大引き印』と作

火をもてて點てて
吹き火

焼ち下地の『下ニ』『威津石根』と焼凝らしと榜繩と

千呂繩サ交けとせよ火へ

厚口籠

あくまくよもやまのとくへて天の『真美』とそもんとくしき

御子、かやく、臺子タカシマをもへき 章句ハガタをもへりも、ひそ
実ミツ、黒クマツ、光彩カクイ、数量リョウナウ、方達カタタケ、枝葉ハラヒ、飾アラシのなまし、ハシマシ、ハシマシ
此コトをもへり、重タメをもへ、又重タメをもへとある。程年コリヒをもへ、年タメをもへとある。右の用物加用の御ミタマとある。文章の
飾アラシをもへ、御ミタマをもへとあるの御ミタマ、ミタマ

鈴屋集卷六和

あらつちのちの御ミタマ神の御ミタマの

御代

御代のセ

御代の

御代

御代の

きよも、まくまくとく、まくは彼の言吃のみ、まくをやまく
そ、まくかく、まくとむく。

同十九

棟梁の下に傍らう。

同廿

道康是夜宣長今告流事有云云

同廿一

五十鈴官者云云

かくも、文の後端す、まくつまくりむせうも、常々文
文の中間すも、丸を稱するときを、とて言へて、まく
まくときを、たやすくい、重くまくときを、まく

てやあらぬひ、群まくとく、化逆せ、比タクをさくわくふ
かく文ハ、まくとく、月半に、いづれもすのあん、まく
まく、めくまく、まくも屬りまくとく。

『豊葦原之』千秋『長五百秋之』水穂國者、云々、祝詞主、萬

千秋之云々もく、

六尺之『勾隱之』五百津之『御統之隱

日向の『敷の』高『千穗の』ニ上代『穗』嵩

朝日の『直刺國』夕日の『照國

『荒鹽之』鹽乃『八百道の』八鹽『道の』八百『會』座

まくのまく、まくとく、まくとく、古文のまくとくひく、
まくとくのまくとく、まくとくとくとくとくとくとくとく

も深く心を用ひるす、すばり筆の、うましく書くことを知
りきる、さて今あきら、称言とすら方より多くいさん者
内、その四つ、何がてあつ稱づきゆの、誰も思はず後
の差違の、うやうやしくしてゆづきやうむれをねぐ
あまく、これれれきつくりにきかうぢ、うも速闇御比
咩の、持可と名むうぢ、速佐湊良比咩の、佐湊良比多
ちうとすち多者、よく言語の、詞の活用、とくにはたど
かうかく編ひりと、其詞をひる、尊卑、褒貶、輕重、浮沈等の意
味あまうを、思ひうなぬ、うかうち文も、うかうのうちの
あまうを、うを渡ふ重きゆうをうかうで、うの重きし方

のうへせまく、御をよきの活用、御辞の、うへのう
のうへあつう、うへりんは、うへるもよくうへるのう
び故くうへうへりく、うへるやあん

出雲風土記上巻

四十 植縫ノ條

所以號植縫者。神魂命詔。五千足。天日極宮之縱橫御量。
竿尋榜繩持而百結々。八十結々。下而此天御量持而所
造天下。大神之宮造奉詔而。

ええ、又出雲國造神壽詞々、

白玉の大仰白學々。白玉の大仰ちゆひゆ。ます玉の水江玉
行相合の御神と

白仰馬の前足の丸。後足の丸。蹄立事。大宮の内外の仰程と

(上津石根の端壁) 下津石根の端凝)

云々 あくちも、准へて あくき ふく、移かへる 従へて
あくちも あくひ、祝詞の文と、云々と 御名者稱せよ、稱辭
竟奉るも あくと、神うやれ、若うやれ、自ら其御名を告ぐ
まつせむ、必を一か、あくちも、申一賜へ、神功記の太郎
神の告、物の御詞)

神風の伊勢國の

百傳の渡會縣の 拆鉢五十鉢宮の神(御名ハ

撞貫木巖御免

事代主神の告へゆる御詞と、天離(向津媛命)と、又同時、

事代主神の告賜の御詞と、
一言主神の告賜の御詞と、
吾者(まこと)も二言

(さうとも)一言

言離の神。葛城之二言主之大神也、云々、顯宗

紀は、天皇の御言舉の大御詞と、
石工振之神榎 本き

天(うら)川
押磐尊 御裔のやくそくまくそく

押磐尊

此等うき、凡て此物のうへり、稱言をも准へてすまへまじ也。
神名、人名のうへり、限るうへりあらん。今がう例へてとひも
准へて、すまへり。鈴屋集の文も、棟隆の文も、准へてとひも
あらん。たゞ言文あら。

これの集、金の考へ、棟隆の文も、准へてとひも、准へてとひも、
かげあらん。又次、道麻呂夜、宣長、之今告流事所、云々
うへり、告乃因、云々、りそ

年代古道

道履別之道、麻呂ミタニ、和魂尔ミタニ、今宣長之、云々とひの
の稱言、行ひまかりあり、又次考る、五年鈴官ミタニとあらん、
すまへて、百傳渡會縣のうへり、又

折鈴之鈴之

五十鈴宮者、云々とひの文也
狀、うへり、とひの文也、あらん。ときとひなれ、更に
裁えども、とひの文也、又考証也、此稱言の
中の一種なり。とひを用ひて、とひ心得何とひだり、
然るに考のうへり、其うちもあらぬやうとひだり、
考の五十七、調のものとひ、とひ個のあらん。とひ
又對句をとひ取合するに、故に歎なり。今世人の文は、文を
かくとも、行ひまかり、とひ、とひせらば、とひだり、
故に古文より、枕詞をあらまし、歌より、とひ、とひだり、
其をとひあらましとひ、折鈴之五十鈴、玉籜、入彦、真髮、

持たるひ、傍まき大刀、日嗣の皇子やまと如く、稱する
と、又上う舉ち、出雲風土記の文なる如く、其為ゆき
をりしも。す物をりしものやうれども、かくある。
既にあらかじめ、文のようす、枕詞を寶勺異類やまと次
ううう、彼千五百丈長五百秋の水穂國、と撞賢木巖
の御魂、半天萬國萬押磐別まるはうの勢の高々雅い
ううう、枕詞の序のよしとくさまの御心、どう此風約
を味ふべくして心得わくべきことを、さきかねて、
用物功用等の美言を飾るべくとおもひて、今は乃
物の序文たゞよし、いとひきまく詞のよしと、枕詞を多
く多くもむちうひがううそううされ、その上風例のりえ。

古訓古事記序

書の中よだまう藤のそよむまきりよく さりせうる
秋山へあくまよきよみ うきちやふ神を古事記の
うううかうの今まほくふく百年何まく五十年何
ううとううかうの寛るが ひる年のかのくふ
ちうちうびくうくろれうくまくちう度會延佳神主のま
ううとうとくまくとくまく あうをはくひまく文章あ
ううも此彼と古き來をも仰食のかむうひかもうちをほま
ううとあれ少寧のこよヌリとまうをむくはくと
つまうまう後のみ漢國書のまくと一何うふくすまう

すらむそひてあから書よみ訓よみて極まであらう
まき風のまき遠里祖の神の御代の雅言よばらうけ
るもきこをすを石上古く夢ひす徒の夏野ゆゑて松
うけすてまきうきうきを真津白玉滑りちを紀
國人長瀬真幸りそくそく小松、うきのまひとて
室長うきくあらうども文学をも訓をも伊勢のふ乃
清き清のまきく日下れ山の直越邊の河く直と
まほくまえすをもくまの思ひともとをなあら
そのま量」をうくまもかくひかせくよあをそ皇
京の書あき人河南共利て雪もふ神のまくみゆ
そも歎くもはら用。まく用。そもあくひも室長の序

あらくもてあせんそもかくひかくもく行もく四の界
き「此樂此樂聞まくまえそくももかくもももくに
まくもくくまくもくもくひくもくもく後浪りそくまく
アセマクアラ掌ひの道れ津多大喜びやうりやう
喜びの神の御靈アソクアソクアソクアソクアソク
又古言清濁考の序

人のりくのまくまくの清濁すまくまきいやくまく
かくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

うまくとあらうひもあまへやうきあれハ云ふ謂
うれと物もまことにあつて、うれとあらうひも
野の夏まかづる湯をゑそそぎがくはすもと
ましらあらげつるきの御司りすすますをか
うきはをもさりう川のまちをわらすすまちあらう
うきはつるきつるきもさり心をもあらす湯
まの河まゆるみをもさりうらうらうらうらう
せすらまゆつるきまゆりうらうらうらうらう
うきがまゆあらうりうれとりうれとみをもさりうらう
うきうきうきうきうきうきうきうきうきうき
うれとひはくねもほくねもほくねもほくねも
これらうきて今まゆるみの文をあらひやうへかくう飾

其文うるき、もと詞、じゆけのう、又此長文の間
う、一所もあや阿木一見主、又花押も、稱ひきふる
置きて、用なきふよ、あらきの多く、あらつけとま、た方
“長くり延く、書短くす、ありをせん、章句無く、ほく拍
手をあらぬといひ、凡て今まゆるみの文をあらひ、これ編て彼
異類、用物、六種の組つりて、襷、辰、飾直、美惡、軽重等の
物をあらむて、まくらのまくら、まくら心とせんて、めう古
今集の序文より、のうせん、やうせん、まくらの文、あらきの文
ほく拍子のうのう方ふ、あらきのうかんじ、又近きまくら
章のうせん書をあらき、歌詞文詞のまくらうかんじ、まくら視
くとくに聞ね、彼花とすめ、歌く、ふ車とし、玉と

リを、文五、之車三、之馬二、限一、馬を駆
る、白駒二、玉を、白玉も、あり、也、瓊玉も、之車
も、之馬も、既一、之文も、之歌も、之調も、之
枕詞二、文三、之歌二、之文一、美稱詞
之官部二、之解一、之歌二、之五七の調も、之解一、常一、章原能二
水穂國三、之解一、之文二、之歌一、豐葦原之、千秋三、長五百秋三、
水穂國三、又歌二、天雲五言之、八重撥別而、之解一、之文
之歌二、押分天二、之八重多那雲一、而、伊都能知和岐知和岐互
之歌二、此時ハ還トて、五七の調の妨げ二、之文
之歌二、歌の盡トれぬタク、又歌二、八百萬五言、千萬神一
之歌二、文三、之八百萬神等二、又歌二、物無

小枕詞二、之文三、之歌二、之文三、直一、之歌二、
之歌二、此時ハ、五七の調ハ、放ト、文二、之歌二、
之歌二、之歌二、此外ハ、歌詞、文詞二、之歌二、之歌二、
之歌二、之歌二、之歌二、之歌二、之歌二、之歌二、之歌二、文二
之歌二、之歌二、之歌二、之歌二、之歌二、之歌二、之歌二、之歌二、文二
之歌二、之歌二、之歌二、之歌二、之歌二、之歌二、之歌二、之歌二、文二
之歌二、之歌二、之歌二、之歌二、之歌二、之歌二、之歌二、之歌二、文二
之歌二、之歌二、之歌二、之歌二、之歌二、之歌二、之歌二、之歌二、文二
之歌二、之歌二、之歌二、之歌二、之歌二、之歌二、之歌二、之歌二、文二

ヲ詞アリテ、用ひ能ムと、文アリ平言アリテ、
アリテ、文アリテ、被詞文用ハ、書き下スルモノ、シテ
シテ、文アリテ、書アリテ、シテ、終ニ被之端書アリテ、
ヤキ文アリテ、文アリテ、所アリテ、文アリテ、
ハ、心ナシルも、被アリテ、文アリテ、文の用ハ、詞アリ
テ、被の用ハ、詞アリテ、文アリテ、外ヨリ、内ヨリ、文アリテ、
シテ、上の際、守部アリテ、古文アリテ、
常ヨリ、口給の言を、規則アリテ、文を、かきそなす形也、
古傳モ、シテ、用ひテ、書きあリテ、口の言アリテ、もんと、
もと、あつて、を、がつて、如何、との用ひテ、書きあリテ、後、傳
シテ、あらびよくも、ちまくも、某の文、
秋のあ、あゆく、あ、い、用ひテ、
シテ、月の、みえ、か、ま、と、傳、シテ、

考ヘ今世、互う繩引、互う手、互ハ、能リ、勿松、詞の
ちやを心ねるは、終も、まゝ、文章ハ、作リ、ちやの、ちよ、或
間云、彼琴、詠集、之對の如く、もんこ、強、もんこ、
もんこ、あり、ひよくも、ちまくも、某の文、
秋のあ、あゆく、あ、い、用ひテ、

又
ちやを、神等、互う地、シテ、も、も、も、
トヨ、國、民、と、り、す、も、も、

あ、ま、本、の、事、す、あ、は、り、と、す、あ、う、れ

そん處へ是がまへてゐる書

きもと新りとしまるをあす、これをうそとすがは
事のなかぬゆのすがるいと、まことやうてくわ
やうと、あの事なれば、うそれをとももとまちかねま
うあてちのとおりすて、外からきやるあらうと、お
も、身のゆききのせよと、うをばくと、彼、まつて
も、身のゆききのせよと、うをばくと、彼、まつて
も、身のゆききのせよと、うをばくと、彼、まつて

秋のよの身やくさく風もす

日もよや
月もよや
年もよや

ちよやう新あうよのと
あるよも

日もよや

月もよや

年もよや

あうよあうよのと
あるよも

日もよや

月もよや

年もよや

やく、學者、新豈等れ様も、かがれんよかくと、
新の方よ、あひうや。心くまゆ、や、又う新もと
のうたはうと、ともあらかじめのうたれやうと、

ヨリ、足りきわざりは、よのまぬれ難きよし者之間を對す中も、
上手手

下手手

よりて、比上下の事、即かうすす、又次よ。

手あわせ

人あわせ

比手も、さうのうかりも、手あわせありや、又間え、さうは近寄
人の文ハ、いざる事は、さうと文をあひあくらむる、
答え、いきうん、古字ひうんでは、多く文のあくらうる、
はのまくらうる、さくとも、あよき引ハ、さくく降て、良
きを補ひ、道を有く、則く活字の、もよきを

ちゆゆや、又間え、さうは近寄の事のやも、さうい社あわせ
を、既に文の上りみはあらず、答え、さういふもさき間え、さう
うし、さうくらうあすけふきあくらひせんじ、さんじうま
あまうと、汗あゆうううううううううううううううう
ううう、汗あゆうううううううううううううううう
ううう、中ま縣彦大人や、もれりあひうん、彼大人の文も、
かううううううううううううううううううううううう
うううううううううううううううううううううううう
又篇主、縣居集卷
三二二

ノリ、おう代よみ人の、うちうりたれハ、うううううううう

かくちようひもかくも、

よなごりしやあれとおとねり

衣あく

夢島

心うれしあ

うめうめ

うめうめ

時をまよひ

まよひ

天地のこゑあれど般よも云ふのせうき門と上るも

りゆも言の

まよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひ

まよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひ

又四三

うめうめちあらあらあらうき
〔秀子〕天をあわせ
〔中つ枝〕あらわせ
〔あう枝〕りうわせ

石千足 鬼す川の高木

野の木のたかくらむるくれまきあられ

天さくやお

タラのまくらづくまも

みゆくま

きくま

だんとうけい

きくま

名もあま、風搖もす、さうさう、さきまくねまよし、四九丁

りつゆきと照月の秋のまよ

うハヅレと行水のすゝめ河のあそ

かう
やまとのかづれ

さうさうさうさうとつねを泣きゆぢ

舟ひのまく桜の枝のむすび

舟はせきめ

あまくさく

あまくさく

あまくさく

舟もさう時でさのうじとすねをやさき

いのうよやてさの舟かくひと動うきあまくさ

いのうよやてさの舟かくひと動うきあまくさ

いのうよやてさの舟かくひと動うきあまくさ

呂の舟歌

舟のゆきと波よみがひ

舟のゆきと波よみがひと舟のゆきと波よみがひ

舟のゆきと波よみがひと舟のゆきと波よみがひ

舟のゆきと波よみがひと舟のゆきと波よみがひ

舟のゆきと波よみがひと舟のゆきと波よみがひ

かうさうさうさうと、さうさうさうと、さうさうと、

さうさうさうさうと、さうさうと、

さうさうさうさうと、さうさうと、大方のゆきと、ひを貫之、

物の人にうなづき、往つてかくまをかくまあらん、又までて
けとすくはりまくら。

事とあくちもひろ
さくらひきるまつまき

響のかか山の風
鶴のひづれの風

すくやくあくまく作りしも、よ響ひり響くも、ちこ
もかくまほくまく、じとまくま、又まくまくらるる
も、

青旗のあくま千里の浦風のむらき

白雲のゆゑも五十の驛宿よゆゑ

かやくよ響ひかくてもまのふうを失ひぬまくも尼まく又

あくま

さくらひきくまくらうて夏のりは汗もまくまく汗をまく
まくまく汗をまくまく汗をまく

さくらひき緒をまくまく、汗もまくまく、まくまく
まくまく、かくまくもまくまくのソシユ、元て長歌文章のまくまく
まくまく、お前まく、まく、まく、まく、まくまくまくまくまく

まくまく、一章のゆゑ、

あくまの門扇
長

やくの門扇を

夕風の吹くまく事ゆゑ

あくまづくらをむけりてり也、右の縣居翁の自作の文也。
齊家やうりとしる所は友のりは云々、かづねはうきのいせん、韵あり
て、そつと經のまも用一格也、うれきて、ちゆゆく、そ經といふことを
よしんでよ、そそばうを津くも、すのよ其間もよそちくも、
被矣めり、多情ちくも、りくも、用一格もよそくと、又彼も
うきやくせとよそく、院の論のあくられ、え東方のを
うれまふきりと、あまふ人あくまく、うきの、の文、ば
テの筆つきと、うく拿くもほくもすうまく、おわゆる
文、やうりよりや、やうりして、りくも、りくもとおわゆる
うきをひく、うきの源くもがくくも勢力とくもよ
きくもつもやは、あくまくあくん、乞文章のうを、ね

あくまづくら、りくも、うえ、或、因みの浦、或、おうじと鶴もす、
おのうじと鶴もす、鶴もす、行て及くぬ、章、まのうかくしもくのく
さく、ふくもじつて、縣居翁の文、ひかれてうつて、ちく序く
ほくも序くも、いづくも、いづくも行くもくもくも、千葉
きのうき、うきやうの作、うきも、底する、おもつての行けと、
相手をけふきもくもくもくも、まくもく文、ひくもく博くもく
かくもくせき、まくもくもくもくもくも、尼、まくもくもくもくもく
経、まくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく
敷、まくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく
まくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく
あくまづくら、年未、被、文、あくん、き、方、すも、りくもくもく

子の作をもとめ、うらへ渡す者をうかがひます
ほんのうしゆは、彼のうらへをもとめ文化、辛丑年書
うとうとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

文政二年九月十日

一わう仲の段の西本

身の外へ

身の外へ

明治十一年九月十五日書寫畢

